

新島襄のこころ——イメージを通して—— (7)

恩人アルフィアス・ハーディー

竹 中正 夫

(大学神学部教授)

多クノ旅人カ米国ノ波士頓^{ボストン}ニ近寄ルニ、或ハ海上ヨリ来ルカ又ハ陸地ヨリ来ルニセ(ヨ)、大厦高樓ノ上ニ著シク聳エ出デタル黄金色ノ丸屋根ヲ見ルトキハ、如何ナル遠路ノ旅疲モ一時ニ忘ルゝ程ニ慰メヲ得ルト申サレマスガ、予モ毎度波士頓ヲ出テ再ビ其ノ市ニ帰ルトキニ、必ラス多ノ旅人ト同シキ感情ヲ覚エマシタ

〔新島襄全集』二巻 四〇八頁〕

これは、一八八七年八月七日に逝去したアルフィアス・ハーディーを記念して一月二〇日に同志社チャペルで行った新島襄の追悼説教の冒頭のことばである。そこでいう「黄金色の丸屋根」というのは、マサチューセッツ州の議事堂であり、現在で

も多くの旅人を慰めてくれていることに変わりない。新島がそこで注目しているのは、その議事堂のやや左手前にある銅像である。それは、アメリカの教育制度の確立に尽力したホーレス・マン (Horace Mann) の銅像である。新島は、その銅像の下に、「Ycative」(「なお存する」)という言葉が刻まれていることを指摘し、恩人ハーディーが彼の心になお生きていることを語っている。アルフィアス・ハーディー (一八一六—一八八七) は、海運界で成功した信仰の厚い実業人であった。彼はアーモスト大学やフィリップスアカデミーなどの理事をつとめるとともに、新島襄をはじめ同志社を長年にわたって支援した米国の海外伝道団体であるアメリカン・ボードの役員会の議

長を一三年もつとめた。

新島襄が孤独な外国の旅でハーディーと出あったことは不思議なめぐみであった。

二人には、二つの点で共同点があった。一つは、新島襄を上海からボストンまで運んだW・テイラー船長はハーディーも同じマ州のチャタムの町の出身であり、ワイルド・ローヴアー号の船主はハーディーであった。

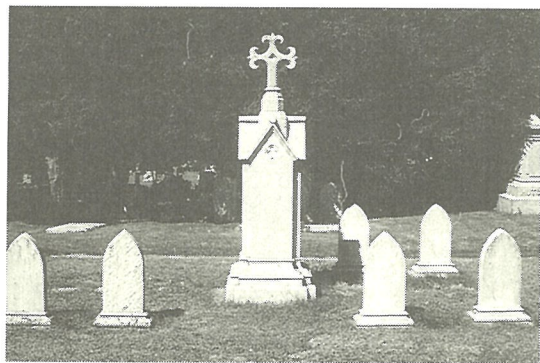
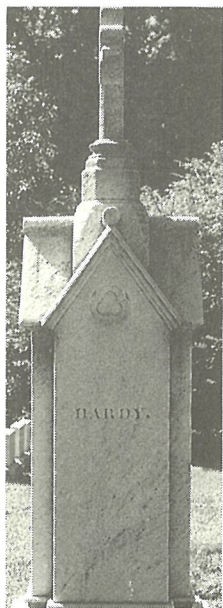
もう一つは、ハーディーも若いとき一時失意孤独のなかにあり、わずか五〇セントをポケットにもってボストンの街角をさまよったことがあったという体験である。孤独と貧しさを味わったということが、二人を結びつけた。さきの追悼説教において、新島は、ハーディーの特色をこうのべている。

「君ノ畢生ノ目的ハ天意ヲ奉載スルニアリテ、君カ世人ヨリ信任ヲ受ケシモ、事業上功ヲ奏セシモ、広ク慈善ノ働キシ爲セシモ、皆尽ク此ノ一点ニ基イテ〔テ〕セシ事ト思ハレマス」

(同上 四二二頁)



アルフィース・ハーディー



ハーディー家の墓地

アルフィース・ハーディーの墓碑